昭和27年5月30日第三種郵便物認可　昭和41年1月21日国鉄東局特別扱承認新聞紙第446号

独立・民主・平和・繁栄の日本を！

7000号むかえた
あかはた——アカハタ
赤旗 日刊 月450円〒90 12頁・1部15円
赤旗 日曜版 月120円〒20 16頁・1部30円

あかはた——アカハタ
赤旗
日本共産党中央機関紙
号外
4月5日（日曜日）
1970年（昭和45年）
発行所　日本共産党中央委員会
東京都渋谷区千駄ヶ谷4ノ26ノ7
振替東京 194897
（日本共産党機関紙経営局）

「よど」号 けさ帰る

石田機長と単独会見

朝鮮人道的措置に感謝

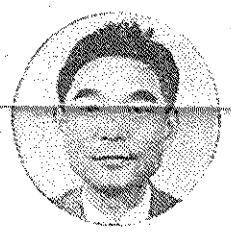
政府の共和国へ の考え変える

羽田に帰着したばかりの「よど」号の石田機長、江崎副操縦士、相原機関士（左から）

三月三十一日、暴力学生集団「赤軍派」に乗っとられた日航機「よど」号は、五日午前七時十一分平壌を出発して、午前九時八分、石田機長、江崎副操縦士、相原機関士、山村運輸政務次官をのせて無事羽田に帰ってきました。羽田を出発以来百二十二時間ふり、きびしい幾日かをたえてきた乗務員は、空港で家族をはじめ多数の人びとにあたたかくむかえられました。

平壌で

小林特派員



小林特派員

【平壌四日午後十一時三十分小林隆特派員】四日午後五時すぎから、平壌国際ホテルで山村運輸政務次官、石田機長と内外記者の共同記者会見がおこなわれました。席上、朝鮮側から最後に「本日午後、日航機と山村氏ならびに乗組員を日本に送り帰す」ことを明らかにした朝鮮中央通信の声明が読み上げられました。それまで記者団の質問のなかで、許可なく共和国北半部にはいり着陸したことの違法性を認め、「最終的には共和国側の法的処罰ももとをえません。その覚悟はしております」と緊張した表情を見せていた山村政務次官は、この声明が伝えられるや、一瞬、目をうるませ、「ありがとうございました」と頭を下げました。さらに石田機長も感激に顔をほころばせ、「私は従来の考え方（共和国にたいする）を変えなければなりません。本当にありがとうございました」とあいさつしました。とくに共同記者会見のあと「赤旗」記者との単独会見に応じた石田機長は、つぎのように答えました。

記者　羽田出発以来、八十数時間監禁状態におかれ、健康状態はいかがですか。

機長　（にっこりして）疲れは残っていますが、元気でいらっしゃいますよ。

記者　共同記者会見のさい、考え方を変えなければならないといわれましたが。

機長　私も年ですからね（四十七歳）。われわれの年代の日本人はみんな、恐ろしい国（共和国のこと）と思っているでしょう。私も教えられることは覚悟していました。それがよもやホテルに案内されるとは夢にも思わなかった。

記者　この貴重な経験を生かして、朝鮮敵視政策をやめさせるよう努力してください。ところで、いったん北上した飛行機が、なぜ南下し金浦空港におりたのですか。

機長　乗客の安全を第一に、福岡から真北に飛び、レーダーにうつった地形や飛行時間から推定して、たしか三十八度線をこえたと思います。その後、機首をやや西に向けて飛びながら、二二・五度ずつ二回にわけて、ソウルの北西にあたる「こちら平壌の進入管制塔である」との連絡がはいり、それに周波数を合わせて誘導され、おりたところが、金浦空港だったというわけです。しかし、そのときわたしはまだほんとうに平壌だと思っていた。

記者　着陸したときはどうでしたか。

機長　三人ぐらい軍人がきて、「朝鮮民主主義人民共和国です。ご苦労さん」というし、そばに白人がいたがてっきりロシア人と思った。

記者　つまりだまされたわけですね。国際法上、重大問題ですね。

機長　どうもそういうことになりますね。

記者　「共産側の対空砲火を浴びた」とも宣伝されたのですが。

機長　そんなことは絶対にありません。米軍や「韓国」の飛行機が、一時接近はしたようですが。

記者　「不法侵入」といわれる金浦から平壌へはどういう航路で。

機長　真東に向けてとび、東海岸から約三十マイルはなれたところから北進し、三十九度線で西にはいり、午後七時十分ごろ平壌につきましたが、天候もわるく、暗くなって、なかなか予定地がみつからず、やむなくいまのところに降りました。

記者　「赤軍派」の脅迫についてひとこと。

機長　羽田を離陸して十五分ぐらいたった富士山の近くで、二人の男が操縦室にはいり込み、日本刀をふりまわしておどしました。そのときは一瞬身のすくむおもいがしましたが、すぐに、かれらの目的地に行くなら危害を加えないということがわかり、わりと気は落着いていました。

不法侵入認める

山村次官

【平壌四日小林隆特派員】共同記者会見の要旨はつぎのとおり（「赤旗」記者の質問とダブる機長の答弁部分は省略）。

問い　共和国北半部の許可なしに領空にはいり着陸したことは、国際慣例から見てどうか。

機長　違反している。

山村　法的処罰もやむをえないが、頼んできたのではない。状況を了承して処置していただければさいわいである。

問い　学生問題が解決するまでとどまる意思はあるか。

山村　共和国の方でそうしようといえばそうする。

問い　四日間も金浦空港に乗客をとどめ、不安と苦痛を与えたのは、人道主義と矛盾しないか。

山村　できるだけ早く機内から出そうと努力したが「赤軍派」は了解してくれなかったので、自分の判断で人質になることを提案した。

問い　国交関係のない共和国北半部にくるほどの勇気のある山村氏は、なぜ朴一味を説得しなかったのか。

山村　日本国内のもめごとを他国に持ちこんでいる。要求するにも限度がある点を了解してほしい。

問い　学生らと共和国側は関係のないことを認めるか。

山村　それは認める。金山大使もそのようにいっていたし、私が同乗した機内で「赤軍派」は、平壌に降りたらおれたちはどうなるんだろう、といっていた。かれらの独断的な事件と断言できる。

問い　平壌に着くまで、そしていまは、何を考えているか。

山村　国内問題を外国にまで持っていって迷惑をかけるのは申し訳ない気持ちだった。それにしても乗客の生命を救って大変よかったし、共和国の方で安全を保障し、配慮ある保護をしていただいていることに感謝している。

問い　いまの処遇、食生活に不満はないか。

山村　ホテルにはいり、医者までつれてきて面倒を見てもらっているので、なんの不便もない。食事はりっぱで、食べ切れないほど多くの量が出てもったいないくらいだ。人道主義的処遇を受けていると思っている。

平壌放送の発表

【KNS時事】五日朝の平壌放送によれば、朝鮮民主主義人民共和国北半部領域にはいってきた日本の旅客機が五日午前七時十一分平壌を出発しました。

日本当局者が不純な政治的目的にわが国を引きずり込もうとするこうかつな企てのもとに、事前予告とわれわれの同意もなしに不意に朝鮮民主主義人民共和国北半部領域に送り込んだ日本航空会社所属のボーイング727旅客機とパイロットそして人質として連れてこられた日本の運輸政務次官は朝鮮民主主義人民共和国の人道主義的な措置によって五日午前七時十一分、平壌を出発し、朝鮮民主主義人民共和国北半部領域を出た。

わが国に不法に侵入した日本のパイロット、日本の政務次官は当然処罰されるべき自分たちを人道主義的原則の立場に立って取り扱ってくれたことにたいして、出発に際し、朝鮮民主主義人民共和国政府に深じんな謝意を示した。

「暴力集団」の発行を許さないために

暴力集団の再発行の疑惑

事前に周到な計画が…

反共デマ宣伝に悪用

長期に計画されていた事件

この事件をめぐる第一の問題、第一の疑惑は、すでに逮捕状が出て、警察が捜査過程中の「赤軍派」の暴力団が自民公然と日航機に乗り込んだということです。

「この一月十七日、大菩薩峠軍事訓練事件でつかまった少年A二人のうち、一人は逮捕されたが、もう一人は逃げた。ボクは北朝鮮へ行くメンバーに選ばれた」（サンケイ新聞、三月三日）。

一日の参院予算委員会では、共産党の渡辺武議員の質問にこたえて、警察庁の川島警備局長は、「〝赤軍派〟のなかにも現実に協力してもらっているものもたくさんいる」と答弁し、警察当局が「赤軍派」に〝情報をとる〟ということで金までわたしている緊密な関係にあり、多くの計画がそれによって事前に察知できたことをあきらかにしています。

機長の権限は完全に無視

第二の問題点は、事件発生後、こうした事件の際の乗員の措置を定めた日航の規定と、本来、全権限を負わされている機長の立場を完全に無視し、外部の指示によってことがはこばれたことです。

乗っ取り事件にたいしては、犯人のいう目的地にまで飛行することが乗客の安全を保障する唯一の方法であることが国際的な常識となっています。「人命尊重」「人道的立場」といいながらいったいなぜそれを無視したのか、とくに福岡をたったあと金浦空港に着陸したのはなぜかについての重大な疑惑が生まれるのは当然です。

機長の権限が完全に無視されたことは、金浦空港で、機長が「人命の安全」のために平壌に飛ぶ以外ないことを要求しつづけたのが、無視されつづけられたことでもあきらかです。

しかも、「朝日新聞」四日付の「政府・各党座談会」で保利官房長官は、平壌行きとみせかけて金浦空港に着陸する計画は知らなかったと発言しています。

もし、関係が知らない間に、この計画がたてられ、実行されたとすれば、ことは重大です。

日航の米空軍要請の背後に

この事件を「毎日新聞」（四日付）は「日航―米・韓国軍が筋書」と書いています。事実、日航機隊の長野運航基地部長は、「よど号」が福岡空港を離陸した直後に「日本の防空識別圏内は航空自衛隊で誘導してもらい、韓国の防空識別圏内は、在韓米空軍と韓国空軍が誘導し、三十八度線をこえないようにしてもらうよう要請した。そのさい、もし停戦ラインを突破しようとしたら威嚇（いかく）発砲をしてもらいたい。ただし、実弾ではなく空砲で威嚇してもらいたいといってある」との趣旨の発言をしています。

自衛隊や米軍、「韓国」軍にこのような要請が一航空会社だけの判断でできるものでしょうか。また一航空会社の要請で日、米、「韓」三国空軍がこのように動くことがありうるでしょうか。だれしも疑問をいだくでしょう。こうした三国空軍の連繋作戦の背後に一航空会社の要請を越えたものがあったとみるのは当然です。

自衛隊の〝海外出動〟の危険

第四にこんどの事件をめぐって、自衛隊の動きがとくに注目されました。

事件発生の三月三十一日午前七時五十二分、連絡を受けた航空自衛隊小松基地からF86F機二機が緊急発進して日航機を追尾しました。〝よど号〟が福岡空港に到着してからの自衛隊の動きは目をみはるものがありました。〝よど号〟の離陸を阻止するために同空港に福岡県警の機動隊員約三百五十人とともに、陸上自衛隊五個中隊が武装して出動しました。

中曽根防衛庁長官は同日夜、自衛隊機が金浦空港に飛ぶことは、「海外派兵か海外派遣になるが、憲法、自衛隊法上どうなるか」との記者団の質問に「海外派遣だろうが人道上の問題のまえにこまかなことはいっておれない」と答えていました。人道上の問題の名のもとに自衛隊の「海外派遣」や憲法、自衛隊法が拡大解釈され、運用されるようなことになってはなりません。

中曽根長官は、「自衛隊機が韓国領にはいることについて、きのう了解をとった」と答えました。この答弁ははしなくも、事件発生と同時に、日、米、「韓」三国空軍の共同作戦態勢をとっていたことをあきらかにしたものといえます。

反動勢力の謀略宣伝と百パーセント呼応

「赤軍派」がさけんでいるのは、「韓国」の朴一派やアメリカ帝国主義、日本の治安当局や反動勢力が謀略的にうんぬんしてきた「間接侵略」論、「北朝鮮の南進、武力統一」論とあきらかにウリ二つです。

日・米・「韓」の反動勢力は、このような謀略的宣伝によって自己の軍事的結合強化の口実としてきましたし、日本の反動勢力はとりわけ軍国主義復活の強化、自衛隊・警察力の強化にこのような口実を利用してきました。とくに最近では、いわゆる「一九七二年暴力革命」論をこれにむすびつけています。京都でも反動連合は、日本共産党は京都を「七二年暴力革命の拠点」にすることをねらっているとデマ宣伝しています。

「赤軍派」のスローガンも、反動勢力のこうした反共・反社会主義の謀略的宣伝の最新の形態にまったく呼応しています。

「北朝鮮の全面武装蜂起と結びつけなければならない」

つまり、一九七二年には朝鮮で「武力統一」を、同時に七二年には日本でも「全面武装蜂起」を、というものです。

こうした反動勢力との呼応関係のなかに、「赤軍派」という挑発者集団の登場の特殊な役割がくっきりとあらわれているのです。

実際に、かれらは権力中枢とのつながりのもとに、反共・反社会主義宣伝と謀略の網（こま）にはまって動いてきたし、こんどの「赤軍派」の日航機乗っ取りと「北朝鮮いき」によって、反動勢力はその政治的窮地にそって救援（こうかつ）な謀略的宣伝をねらっているのです。

反共謀略宣伝を見抜く

反動勢力は、府知事選がはげしくたたかわれている京都ではさっそく、「赤軍派」は日本共産党の「二派」で、「親顕節」であるとデマ宣伝し、警察庁警備局長は早くも二日配布の『今週の日本』（五日付）で「きょうは赤軍派」だが「あすの暴力は日本共産党」だなどと、日本共産党を「暴力政党」にゆがめさかく謀略的宣伝をつよめています。この警察当局は、『赤軍派』を泳がせ、暴挙を防止できなかったことにたいする一言の反省もせず、しかも事件が発生するやいなやこういう暴言をしている点で、大きな疑惑をよぶものです。

「赤軍派」という挑発者集団の暴挙が、共産党は自主独立の立場をとっているが、「世界革命」の一環をになっており、「国際共産主義」の「日本役人」に手をかすにちがいない、「赤軍派」をみる、といった反動勢力の謀略宣伝に〝裏づけ〟をあたえようとするものであることも、われわれは鋭く見抜く必要があります。

暴力集団の発行を許さないために

朝鮮政府の人道的処置の発表に際して

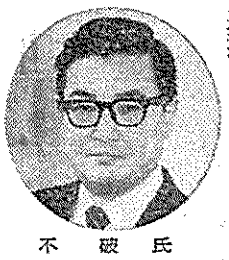
共産党 不破政治・外交政策委員長が談話

日本共産党中央委員会不破哲三政治・外交政策委員長は、日、つぎの談話を発表しました。

一、日航機「よど」号は、けさ羽田に帰った。石田機長らと機体が無事帰ったことをよろこぶものである。これは朝鮮民主主義人民共和国が、今回の事件にたいして、一貫した人道的見地から対処してきたことを、かさねてしめしたものである。

一、朝鮮問題について、「韓国」とのみ装し朝鮮民主主義人民共和国を敵視するという佐藤内閣の政策は、今回の事件の解決をつうじていっそうあきらかになった。

一、政府・警察当局が反共の意図から「赤軍派」暴力学生にたいして意識的な「泳がせ政策」をとってきたことは、「赤軍派」内部に多数の「協力者」をもっているという警察当局自身の国会での証言や、警察当局が「赤軍派」にこの種の計画があることを知りながら、これを事前におさえる必要な措置をおこたってきた事実を指摘する一般新聞や週刊誌の報道などによっても、裏づけされています。


不破氏

一、「赤軍派」暴力学生は、朝鮮民主主義人民共和国を「スターリン主義」としてみずから打倒目標としながら、「七〇年武装蜂起」や「北朝鮮の革命根拠地化」などをとなえ、暴力的挑発をくりかえすことで、反共宣伝の絶好の材料を反動勢力に提供してきた謀略的挑発者である。かれらがどんなに「政治に命をよそおおうと、反共政治謀略の一環をになった挑発者、反社会的犯罪者が、政治」命者、の地位や権利を主張することができないのは、自明のことである。

監禁された医師の手記から

本音をはいた暴力学生

福岡市千鳥橋病院　江島輝彦氏

かれらは、朝鮮民主主義人民共和国がかれらを受け入れてくれるとほんとうに思っているのかと、最初から疑問に思っていました。かれらは、〝目的〟成功と思った二日の夜の〝お別れパーティ〟で、気のゆるみからか「北鮮は労働者国家といってもスターリン主義官僚が支配している、われわれはプロレタリアを支援し、真の労働者国家にする」ということをいいました。「金日成を強盗してやる」――現在の朝鮮民主主義人民共和国政府を打倒するという意味でしょうが――こういうことばさえ公然とはきました。時が時だけに、これはかれらの本音だったと思います。